
トロヴァトーレ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トロヴァトーレ

【Nコード】

N3457F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

十五世紀スペイン。ジプシー出身の吟遊詩人であり騎士であるマインリーコは絶世の美女レオノーラと恋仲にあった。だがレオノーラを愛するルーナ伯爵が彼の前に現われ運命の歯車が狂いだす。ヴェルデイの作品の中で最も劇的な作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 決闘

十五世紀はじめのスペインでの話である。この時代のスペインは大きく分けて三つの国で構成されていた。

まずは東のアラゴンと西のカスティリア。そして南には後ウマイア朝の流れを汲むイスラム教徒達の国があった。宗教的にはキリスト教とイスラム教に別れていたのである。

そうした状況にあつては抗争が頻発するのも当然であつた。宗教的なものや国家同士の争いだけでなくそれぞれの国の中においても戦いはあつた。所謂内戦である。

アラゴンにおいてもそれは同じであつた。当時この国は王位継承を巡つて熾烈な争いが続いていた。皇太子とそれに対抗する大貴族のアラゴン全土を巻き込んだ戦いとなつており、その中でもビスカヤでの戦いはとりわけ激しいものとなつていた。

この地域は皇太子派の重鎮であるルーナ伯爵が治めていた。若いながら英気と才知に溢れた男であり皇太子からの信任も篤かつた。能力だけでなく部下や領民に対しても温厚であつた。しかし彼は敵に対しては容赦のない男であつた。その為ここにいる皇太子の政敵ウルヘル伯爵の一派からは蛇蝎の様に嫌われていた。

そんな彼の宮殿はアリアフェリアにあつた。かつてイスラム教徒達により建てられたこの宮殿は皇太子により彼に渡されたものであり、イスラムの名残もある美しい宮殿であつた。代々王が戴冠式を執り行うこの宮殿を任されたことが彼の信任の篤さを教えていた。

今彼はこの宮殿にて休んでいた。その間彼の兵士達は夜の警護についていた。

「おうい」

低い男の声が闇の中に響いた。

「居眠りなどではおらん」

「あ、フェルランド様」

兵士達はその男に顔を向けた。見れば濃い髭を生やした初老の男だ。鎧は兵士達のそれより質がよく、マントも羽織っている。どうやらそれなりの身分にある者らしい。

「皆起きております」

「それは何より」

彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「だが起きているだけでは駄目だぞ」

「それはもう」

兵士達は答えた。

「皆辺りに警戒を怠ってはおりません」

「よしよし」

それを聞いてさらに満足そうに頷いた。

「伯爵は今日は眠られぬからな」

「どうしてでしょうか」

「この宮殿に敵が迫っているのですか？」

「それもある」

フェルランドはそれに答えた。

「だが他にも理由がある」

「それは」

「伯爵は今恋をされておられるのだ」

「恋」

「そうだ」

彼はそれに答えて頷いた。

「一人の美しい御婦人に恋をされておられる。だが」

「だが？」

「それには障壁がある。一人の恋敵がいるのだ」

「それが伯爵の敵」

「うむ」

フェルランドは頷いた。

「一人の吟遊詩人だ。だがただの詩人ではない」

「騎士でもある」

「そうだ。だからこそ気をつけなければならないのだ。伯爵の御身に何かあれば一大事だ」

「はい」

「だからこそ気をしっかりと。眠ってはいかんぞ」

「ですが夜は深いです。そして長い」

「眠いか」

「申し訳ありません」

彼はすまなそうにそう答えた。

「だが眠るわけにはいかんぞ」

「しかし」

「わかった。仕方のない奴等だ」

フェルランドはそう言って苦笑した。

「ではあの話をしようか」

「あの話」

それを聞いた兵士達が顔を上げた。

「あの話ですか」

「うむ」

フェルランドはそれに応えた。

「ガルシア様のお話をな。伯爵様の御実弟の」

「是非お願いします」

皆せがんだ。フェルランドはそれを見て満足そうに頷いた。

「わかった。では集まってくれ」

「はい」

彼等はそれに応えてフェルランドの周りに集まってきた。そして耳を傾けた。

「皆いるな」

「ええ」

一人が辺りを見回して答えた。

「では願います」

「わかった。でははじめぞ」

彼は口を開いた。そして話はじめた。

「先代の伯爵様には二人の御子がおられた。その御子達に囲まれ幸せに暮らしておられた」

「よい時代でした」

年老いた兵士がそれを聞いて呟いた。

「ああ、いい時代だったな。忠実な乳母が御子達を育てていて。あの時もそうだった。揺り籠に添い寝していた。あれは夜明けが訪れた頃だっただろうか」

「何が起こったのですか!？」

若い兵士が彼に問うた。

第一幕その二

「まあ聞け。焦らずにな」

「は、はい」

フェルランドがそう言つて彼を嗜めた。

「話を続けよう。乳母が目を醒ますとその傍らにあの女がいたのだ」
「あの女!？」

「そうだ。一人の卑しいジプシーの女だ。年老いた無気味な女だった。魔女の邪な眼で若君を見ていたのだ。呪いをかけようとしていたのだ」

「何と」

「乳母はその女を見て思わず叫んだ。衛兵達がそこに駆けつけその女を追い出した。それでその話は終わる筈だった」

「魔女を生かしていたのですか」

「そうだ。伯爵様の温情だった。しかしそれが過ちだった」

「過ちだったのですか」

「うむ。聞くところによると星占いをしたかったそうだったからな。怪しかったがその場はそれで見逃した。だがそれはあの魔女の嘘だったのだ」

フェルランドの顔が嫌悪に歪んだ。

「若君は次第に顔が蒼ざめられた。痩せ衰え、力がなくなつていったのだ。昼も夜も何かに怯えて泣かれていた」

「まさかそれは」

「魔女の妖術だったのだ。それを知つた伯爵様は激怒された。そしてあの魔女を捜し求め遂に捕らえられた。その魔女は火炙りとなつた」

「当然ですな」

「しかし魔女は一人ではなかったのだ。娘が一人いたのだ」

「何と」

「この娘はおぞましい行動に出た。何と若君を盗んだのだ」

それを聞く年老いた兵士達の顔に絶望が覆った。若い兵士達は驚いていた。

「そしてどうなりました!？」

彼等は問わずにはいられなかった。

「すぐに若君の行方が捜された。そして見つかった」

「よかった」

若い兵士達はそれを聞いて安堵した。だがフェルランドと年老いた兵士達が彼等に問うた。

「本当にそう思うか!？」

「えっ!？」

「若君はあの魔女が焼かれたその場で見つかったのだぞ。焼け落ちた骨となつてな」

「そんな……」

「何と恐ろしい……」

若い兵士達はそれを聞いて驚愕した。

「とんでもない女だ。何という悪人か」

「それを聞いた伯爵様の絶望は如何程のものだったか。それから絶望の中に生きられた」

「おいたわしや」

「だが伯爵様は主に告げられた。ガリシア様は死んではない」と

「本当ですか!？」

「うむ。そして死の床で我等の主君である今の伯爵様に仰られたのだ。生きているならば必ず探し出せ、とな」

「そうだったのですか」

「だが今も見つかってはおらん。何処かで幸せに生きておられればよいが」

「はあ」

「そして女はどうなりました?」

一人の若い兵士が質問した。

「あの魔女の娘か」

「はい。捕らえられたのでしょわか」

「そう聞いたことがある。だがな」

「はい」

「まだこの世に留まっっているとでも言われている」

「それはまことですか!？」

「あくまでそう言われているだけだがな。魔女は暗闇の中様々な禍々しい存在に姿を変えるとされているな」

「はい」

それを聞いて顔を青くしない者はいなかった。篝火の中にその顔が映し出される。

「ヤツガシラやタゲリに化けるといつ」

フェルランドは語った。

「カラスやフクロウ、ミミズクにもな。夜が訪れると共に闇の中を徘徊し、夜明けと共に去ると言われている」

「何と恐ろしい」

「その眼は邪悪な光で爛々と輝いていると言われている。従者の一人がその眼に見られて死んだという。その母親を殴った者がだ」

「ではまさか」

「フクロウに化けた女にな。真夜中にその黄色く光る邪な眼を見たらしい」

「何ということだ」

「恐ろしい女だ」

彼等は口々に恐怖の言葉を述べた。

「これで話は終わりだ。これで目が醒めたか」

「待って下さい」

ここで若い兵士の一人がフェルランドに尋ねた。

「何だ」

「その女の名は何といますか」

「名前か」

「はい。知っておきたいのですが」

「うむ。それはな」

「はい」

皆耳をすます。ゴクリ、と喉を鳴らした。

「アズチエーナという」

「アズチエーナ」

「そうだ。よく覚えておくがいい。この禍々しい名を」

「はい」

彼等は頷いた。それを見届けるとフェルランドは席を立った。

「ではこれでいいな。警護を再開しよう」

「はい」

彼等はそれぞれの持ち場に戻った。その頃宮殿に庭に二つの影があつた。それはいずれも女のものであつた。

「姫様」

そのうちの一人がもう一方の女の影に声をかける。

「王妃様が御呼びですよ」

黒い髪をした小柄な女性であつた。まだ若く初々しい顔立ちをしている。

「わかつております」

声をかけられたもう一人の女が答える。高く澄んだ声で。

茶色く長い髪に青い湖の様な瞳を持つ美しい女性であつた。その顔立ちはまるで絵画の様に整っており、気品が漂っている。背は高くスラリとしている。その容姿が白く綺麗な服によく合っている。

第一幕その三

「それでは早く戻って下さいまし」
「けれど」

だがその貴婦人は戸惑っていた。

「あの方が来られないから」

「あの方とは」

「イネス、貴女は知らないのね」

貴婦人は悲しそうな顔でそう答えた。

「あの方を。この前の馬上試合でのあの方を」

「何方でしょうか」

「知らないのね。あの黒い装束の方を。紋章のない黒い楯を持って
おられたあの方を」

「申し訳ありませんが」

「あの方が優勝されて私が花の冠を授けたのよ。それっきり御会い
していないけれど」

「それなら」

「話は最後まで聞いて」

彼女は強い声でイネスに語った。

「この戦いで。もう長いことになるわね」

「はい」

この内乱がはじまってもう長い年月が経っていた。

「ある夜のことだったわ。静かで銀色の月が輝いているあの夜」

「はい」

「その夜に聴こえてきたあのリュートの音色。一人のトロヴァトー
レが奏でたあの音色」

「それがどうしたのでしょうか」

「話はよく聞いて。そのトロヴァトーレは歌いながら私の名を呼ん
だのよ。レオノーラと」

「まあ」

それを聞いたイネスは思わず声をあげた。

「その歌が聴こえた露台に行くとおられたの。あの黒い服を着られていて。そのお姿はまるで夢の世界のようでしたわ」

「私はそうは思いません」

だがイネスはそれには首を横に振った。

「何だか不安になります」

「どうして？」

それを聞いたレオノーラは怪訝そうに尋ねた。

「何となくです。何やら不吉な予感が」

「そうなの。どうしてかしら」

イネスは確かに不吉なものを感じていた。

「その方のことはお忘れになられた方がよろしいのでは？」

「何を言ってるの」

レオノーラは眉を顰めた。

「それがお嬢様の為だと思えます」

「貴女は何もわかっていないわ」

レオノーラはそう反論した。

「だからそんなことを言うのよ」

「そうでしょうか」

「そうよ。私にはあの方を忘れることなぞできはしない」

「そうなのですか」

「そうよ。それが私の運命なのだから」

彼女は半ば酔っていた。

「あの方を思い生涯添い遂げることが」

それは恋に酔っていたのである。

「後悔なさいませんね」

「ええ」

「決して」

「勿論よ。何を言っているの」

「いえ。それならばいいです」

イネスは何かを諦めたように答えた。

「私は全てをあの方に捧げるわ。この命でさえも」

「そうですね。それでは」

イネスはそれを聞いて観念した。

「もう私からは何も言う事はありませんわ。それについては」

「そうなの」

「けれど今はおいで下さい。王妃様が御呼びですので」

「わかったわ」

イネスに促されレオノーラは庭を後にした。暫くしてそこに白い服とマントに身を包んだ長身の男が姿を現わした。

「静かな夜だ」

男は低い声でそう呟いた。

「王妃はもう休まれたか。だがあの娘はまだ起きているだろう」

黒い髪と瞳がよく似合う端正な顔立ちをしている。彫が深く、男性的な勇ましさが顔に出ている。そして顎鬚も黒くその男らしさをさらに際立たせている。身体つきも筋肉質で整っている。

彼の名をルーナという。皇太子派の重鎮であり、今自身の居城でもあるこの宮殿に王妃を迎えている。そのことからわかるようにその王妃や皇太子からの信任はかなり篤いものであった。切れ者としても知られている。

「レオノーラ、貴女はきつと起きている筈だ。私は貴女を想ってやまない。この想い、これを贈りたい」

彼もまた恋に燃えていた。そして階段の方に足をかける。そこであるものを聞いた。

「むっ」

それはリユートの音色であった。

「これはまさか」

それを聞いた伯爵の足が止まった。

「近付いて来る。これはまさか」

「その通りだ」

やがて目の前に一人の黒づくめの男が姿を現わしてきた。黒い服とマントに身を包んでいる。その長身はまるで鞭の様にしなやかだ。

まるでギリシア彫刻の様に端正な顔であつた。黒い髪を後ろになでつけ、髭はない。目は黒く輝いている。そして何故か左半分が微かに歪んでいるような感じがした。端正ながらそれが極めて不思議であつた。

「ルーナ伯爵だつたな、確か」

「貴様は」

伯爵は彼を見上げながらその名を問うた。

「マンリーコという。この名は知っているな」

「知らぬ筈がなかるう」

伯爵はそう言い返した。

「ウルヘルに与する謀反人が」

「謀反人が」

だがマンリーコはそれを鼻で笑つた。

「面白い。では貴様も同じだ」

「どういふことだ」

「貴様が負ければ貴様自身が謀反人となる。違つわ」

「言つか」

伯爵はその言葉に憤つた。

「何度でも言おう。貴様こそが謀反人だとな」

マンリーコも負けてはいなかった。そこに誰かがやって来た。

「むっ」

二人はそちらに顔を向けた。見ればレオノーラであつた。

「吟遊詩人様ですね」

彼女は何故か伯爵の方にやって来た。

「レオノーラです。お慕い申しております」

「何っ」

それを聞いた伯爵が驚きの声をあげた。

「私は決めました。この命の全てを貴方に捧げよう」と

「何と言うことだ」

伯爵の顔が紅潮していく。それは暗闇の中からもよくわかった。

「私ではなかったのか」

「その声は」

レオノーラはそれを聞いてハツとした。

「貴方はまさか伯爵」

「そうだ」

彼は無然として答えた。

「これは一体どういうことなのだ」

マンリーコが下に降りて来た。

「レオノーラ、貴女は何をしておられるのだ」

そしてレオノーラの前に姿を現わした。

「私がマンリーコだが」

名乗った。それを聞いたレオノーラの顔が輝いた。

第一幕その四

「マンリーコ……。。はじめて聞く御名」

「まさか貴女は私を」

「はい……。」

レオノーラはコクリ、と頷いた。

「それが私の望みであります」

「そうだったのか」

マンリーコもそれを聞いて頷いた。

「それは私もだ。何という喜びであるうか」

「はい」

「最早これ以上の望みはない。想い人がこの手の中に入るのだから」

「それは私もです」

二人はうつとりと見つめ合っていた。だが伯爵はそれを見てその身体をワナワナと震わせていた。

「待て」

彼はマンリーコに怒りに満ちた言葉をかけた。

「謀反人でありながら大胆にも王妃様のおわすこの宮殿に入るだけでも許せぬというのに。まだ居座るつもりか」

「そうだと言ったら」

マンリーコも伯爵を見据えた。

「私は常に死神の鎌の下にいる。この黒装束はその証」

「それは私もだ」

伯爵も言い返した。

「この白の服は我が主君への偽りなき心の証。それを脅かす者は誰であろうと許しはせぬ」

「嫉妬ではないのだな」

ここで伯爵を挑発した。

「まだ言うか、この下郎」

伯爵はさらに激昂した。

「何度でも言おう」

マンリーコは彼を見据えた。

「嫉妬しているとな、卿が」

「面白いことを言う」

伯爵は酷薄な笑みを浮かべた。

「それでは私も貴様に言おう」

「言ってみるがいい」

「貴様に死を与えとな」

「ほう」

マンリーコはそれを聞いて頬を吊り上げた。

「ではどうするつもりだ。衛兵でも呼ぶつもりか」

「そのようなことはせぬ」

「ではどうするつもりだ」

「これだ」

伯爵は剣を抜いた。

「これで貴様の首を落としてくれよう」

「望むところだ」

マンリーコも剣を抜いた。

「では行こう、決闘だ」

「うむ」

マンリーコも伯爵も互いを見据えて頷き合った。レオノーラはそれを
見て顔を青くさせていた。

「私はどうすれば」

「レオノーラ」

そんな彼女にマンリーコが声をかけた。

「貴女は何も気にすることはない。すぐに終わる」

「そうだな」

伯爵はそれを聞いて言った。

「貴様が死ぬからな」

「そんな……!!」

レオノーラはそれを聞いてさらに顔を青くさせた。

「そうになったら私は……。マンリーコ様、お止め下さい」

「それはできない」

しかしマンリーコはそれを拒絶した。

「この男を倒すのは我が宿命、我が主君の望みでもある」

「それはこちらとて同じこと」

黒い騎士と白い騎士が白銀の月の下で睨み合った。

「だが愛は我が手にある」

マンリーコは勝ち誇って伯爵に対してそう言った。

「ならば私は」

伯爵は彼を睨み返した。

「その愛を奪い取って我が愛としてみせよう」

「出来るものならな」

二人はそこで姿を消した。暗闇の中から剣撃だけ聞こえる。レオ

ノーラはその音を白い顔で聴いていた。

第二幕その一

第二幕 ジプシーの女

二人の決闘から暫く時が流れた。その間戦いもあり内乱は今も尚続いていた。人々はそんな中においてもそれぞれの生活を送っていた。

それはジプシー達も同じであつた。放浪の民である彼等にも生活があるのである。

彼等は山のふもとに集まっていた。そしてそこで時が来るのを待っていた。

「見る、夜が明けたぞ」

誰かが言った。夜の帳が脱ぎ捨てられ空がその衣を変えていた。

「後家さんが喪服を脱ぐようだ。そして俺達の一日がはじまる」

「おう」

他の者達がそれに合わせる。

「さあ、仕事だ。仕事をはじめろ。皆道具を手に持て！」

「よし！」

ジプシー達はそれぞれの道具を手にした。そしてそれを打ち叩く。

「女達よ、俺達ジプシーの生活を彩ってくれる女達よ」

「呼んだかい!?!」

ここで女達も姿を現わした。

「酒をくれ。景気付けにな」

「あいよ」

それぞれに杯を手渡す。そこにはワインが入っている。

「飲むぞ、太陽が入っているこの葡萄酒の美酒を」

「よしてきた！」

頭領らしき壮年の男の言葉に従い皆それを一気に飲み干す。

「じゃあ行くぞ。今日も一日仕事だ」

「おう！」

皆元気に山を降りていく。男も女も。だが一人そこに残っている者がいた。

それは一人の中年の女であった。三十代後半程のジプシーの女であった。色は浅黒く、髪はまるで暗闇の様に黒い。その黒い瞳は何かを見て怯えているようである。そしてその顔も整ってはいるがやはり何かに怯えているようであった。そして同時に憎悪、狂気も漂わせていた。彼女はもう弱くなった焚火の前に一人座っていた。うずくまるように。

「火が燃えている」

女は目の前に残る焚火の残りを見ながら呟いた。

「あの時もそうだった。勢いづいた人の波が火に向かって駆けて行った。嬉しそうな顔で」

呟く度にその顔が恐怖に歪んでいく。目の光には狂気も混ざっている。

「喜びの声の中一人の女が引き立てられていった。忌まわしい地獄の業火に向かって」

頭を抱えた。

「炎はさらに燃え上がる。生け贄を求めて天まで燃え盛り。人々はその炎を見てさらに叫ぶ、殺せ、殺せ、と」

息が荒くなつていく。目が血走っていた。

「女はそれを恐怖と絶望の顔で見ている。人々はその惨めな姿を見てさらに笑う。天罰だ、と」

「一体どうしたんだい、母さん」

「ここで後ろから一人の男が姿を現わした。」

「またうなされていたのかい？」

「マンリーコ」

女は後ろに現われたマンリーコに顔を向けた。マンリーコは彼女の隣に来て座った。

「起きていたのかい」

「皆の声でね」

彼は笑ってそう答えた。

「あれだけ騒げばね」

「そうだったのかい」

「ああ」

彼はそれに答えた。

「皆もう行つたんだね」

「そうだよ、仕事にね」

「俺も傷が癒えたら行かなくちゃならないけれど」

「けれどそれにはまだ早いよ」

だが女はここでマンリーコを止めた。

「御前の傷はかなり深かったからね。用心おしよ」

「わかつてるよ」

マンリーコは優しい笑みを浮かべてそれに応えた。

「自重しているよ。母さんの為だたらね」

「わかつていればいいんだよ」

女はそれを聞いて目を細めた。

「御前は何といてもこのアズチエーナの大切なたった一人の息子

だからね」

「うん」

「だからね、決して無茶はするんじゃないよ」

「それは無理かも知れないけれど」

マンリーコは少し悲しい顔になった。

「俺は騎士だからね」

「そうかい」

アズチエーナもそれを聞き悲しい顔になった。

「ところで」

「何だい？」

マンリーコは問うてきた。

「さっきの独り言だけけれど」

「ああ、あれかい」

「前からよく言っているよね。あれは一体何なんだい？」

「昔の話さ、昔のね」

「昔の」

「そうさ、御前にはまだ何も話してはいなかったか」

「寝言でよく聞いてはいたけれど。前から気にはなっていたよ」

「そうかい。聞きたいかい、この話」

「よかったら」

マンリーコはせがんだ。

「是非聞かしてくれないかい」

「わかったよ」

アズチエーナはそれを聞いて頷いた。

「御前は小さい時からいつも外に出ていた。だから話す機会もなかったしね」

「うん」

「じゃあ話すよ。この話を」

異様に長い前置きであった。

「あの忌まわしい話を、御前のお婆さん、私のいとっしお母さんの最後をね」

「ああ」

マンリーコは頷いた。その顔からはもう笑みが消えていた。

第二幕その二

「あの時はね、地獄だった」

アズチエーナはまずこつ前置きをした。

「あの伯爵がね、悪い伯爵がいた」

「伯爵が」

「そうさ。自分の子供の病気を御前のお婆さんのせいにしたんだよ」
「何という奴だ」

「妖術をかけたと言いつけりをつけてね。そしてお婆さんを捕まえた」

「そしてどうなったんだい!？」

「火炙りさ。魔女がいつもそうされるようにね」

「恐ろしい。無残な話だ」

「そうだろうよ。お婆さんは足枷をかけられて引かれて行った。処刑場に」

そう語る彼女の目に炎が宿っていた。

「あたしはお母さんを追いかけたよ。幼い子供を抱いて」
「助けに行つたんだね」

「そうさ。けれどね、どうしようもなかった」

「そうなのか」

マンリーコはそれを聞いて沈み込んだ。

「お母さんは罵られ、嘲笑われながら処刑台に連れて行かれた。そしてそこにくくりつけられた」

「火炙りにする為に」

「ああ。そして火が点けられた。それは瞬く間に燃え上がった。お母さんを包み込んだ」

「恐ろしい、その伯爵は人間ではない」

「そうさ、あいつは悪魔だったよ」

その声に憎悪がこもる。

「お母さんは嘲りや罵りの中あたしを見つけた。そしてこう言ったんだ」

「何と言ったの？」

「仇をとってくれてね。そしてそう言い残して死んだ」

「そうなのか」

「そしてあたしは決意したんだ。必ず仇をとってやるってね」

「仇はとれたの、母さん」

「それも今から話すよ」

「うん」

一旦句切った。

「あたしは伯爵の子供を攫った。一人夜の城に忍び込んで」

「うん」

「そしてお母さんが死んだあの処刑台に連れて行っただのさ。その時まだ燃え盛っていたよ、炎が」

「お婆さんの憎しみの炎が」

「そうかもね。それにあたしはね」

「まさか」

「そうさ」

アズチエーナは笑った。悪魔の笑みであった。

「泣いている子供をね。放り込んでやったのさ。苦しかったよ、胸が潰れそうだった。けれどあたしの目にあの光景が浮かんだんだ」

今も見えていた。母を焼く炎が。その中で呻き、苦しみながら死ぬ母が。そしてそれを罵る群衆が。

「あたしに言うんだ。お母さんが。仇をとってくれて」

「それに従ったんだね」

「ああ。子供を放り込んだよ。思い切りね。そして暫くして落ち着いた」

「どうしたんだい？」

「あたしは見たんだ。目の前に」

「お婆さんのかい？」

「いや、伯爵の子供を」

「えっ!？」

それを聞いたマンリーコは思わず声をあげた。

「それは一体どういうことなんだい!？」

「あたしはねえ」

アズチエーナは語りながら震えていた。

「うん」

マンリーコも息を呑んだ。そして母の話に耳を傾けた。

「自分の子を」

「自分の子を」

「火の中に放り込んでしまっていたんだよ!」

「恐ろしい!」

それを聞いたマンリーコは思わず叫んでしまった。

「何という話だ!」

「あたしは自分の子供を焼き殺してしまったんだ!」

「それは事実なのかい、お母さん!」

「そうさ、本当の話なんだよ!」

それを話すアズチエーナの顔は鬼気迫るものがあつた。まるで地獄の奥底で呻く幽鬼の様であつた。だがここでマンリーコは一つのこと気付いた。

「待ってくれ」

「何だい?」

「母さんは今自分の子供を焼き殺してしまったと言つたね」

「ああ」

「じゃあ俺は一体何なんだい?」

「何だつて?」

「いや。俺はじゃあ母さんの子供じゃないんじゃないかい?自分の子供を焼き殺したんだろう?」

「ああ」

「そうなると俺は……」

「御前はあたしの子供だよ」

アズチエーナは彼に優しい声でそう語りかけた。

「けど今」

「疑うのかい？」

「いや」

そう言われると否定するしかなかった。

「御前はあたしの子供だよ。それは保証するよ」

「けれど今」

「あの時のことを思い出すとね、何が何かわからなくなってしまっ
てね」

「そうだったの」

「ああ。だから安心おし。何時だって御前の優しい母さんだっただ
ろっ？」「

「うん」

マンリーコは母の言葉に頷いた。

「あの時もそうだったじゃないか」

「ああ、そうだね」

「ペリリヤの戦場で倒れていた時、来ただろう」

「あの時は死んだと思っただよ」

マンリーコはそう答えた。

「あたしは心配だったんだ。御前が死んだんじゃないかと思ってね」
その顔には仁愛があった。優しい母親の顔になっていた。

「けれど生きていてほっとしたよ。それで御前をここに連れて来た」
「そして手当てをしてくれたね」

「そうさ。こんなことを本当の母親以外に誰がするんだい？」
「いや」

マンリーコは首を横に振った。

第二幕その三

「わかってるよ。母さんは俺の只一人の母さんだ」

「そうさ。そして御前も」

アズチエーナもそれを受けて言った。

「あたしのたつた一人の息子さ」

「うん」

二人は頷き合った。そしてマンリーコは話を変えた。

「あの時の傷は深かった」

その時の戦いのことが胸に浮かぶ。

「味方は敗走し、戦場には俺一人となった。味方を逃がす為に」

彼は後詰となったのだ。

「そこにあのルーナ伯爵が来た。奴は俺に剣を向けて来た」

「そしてその剣で傷を受けたんだね」

「ああ」

彼は答えた。

「あの時御前はあの男に情をかけたそうだね」

「うん」

マンリーコはそれを認めた。宮殿での庭における決闘の話だ。あの時彼は勝つたのである。あ

「何故かはわからないけれどね」

「何故なんだい？」

「ううん」

マンリーコは首を傾げた。

「あの時俺は奴を倒したんだ」

「それで全ては終る筈だったんだ」

「しかし御前はあの男の命を助けた」

「あの時ね、剣を振り下ろそうとしたんだよ」

「へえ、そうなのかい」

「うん。けれどその時身体が硬直したんだ。そして天から声がした」
「天から」

「そうなんだ。殺してはならぬ、と」

「おかしなこともあるもんだねえ」

「そう思うかい、母さんも」

「当たり前だよ。それで御前はそれに従ったんだね」

「ああ。俺はその場は退いた。剣を収めてね」

「ところがあいつはそれを恩には思わなかった」

「ああ、その通りだ」

どのみち殺すか殺されるかの関係である。情なぞは不要であった。

「そして俺は傷を負った。もう天から何を言われようと俺は従わない」

「殺すんだね」

「当然さ。俺はその為に死ぬかも知れなかったんだからね」

「そうだよ、そうするがいいさ」

アズチエーナは息子の決断を褒めた。

「絶対に倒すんだよ」

「ああ」

マンリーコは頷いた。

「この剣をあいつの心臓に突き立ててやる」

彼は剣を抜いてそう言った。

「あの極悪人の心臓を貫く。そして人思いに決めてやる」

剣が炎の光を受けて赤く光る。それはマンリーコの白面も照らしていた。微かに歪んでいるその左の面を禍々しく照らし出していた。

「そう、そうするがいいさ。そして」

アズチエーナは息子に対して言った。

「仇をとっておくれよ」

「うん」

マンリーコは頷いた。ここで黒い服を着た使者が姿を現わした。

「マンリーコ様」

「どうした？」

「これを」

使者はマンリーコの前に来ると跪いた。そして一片の書状を差し出した。

「ふむ」

彼はそれを受け取った。そしてそれを開いた。

「カステルロールは我等の手中に帰した」

彼はそれを読みはじめた。

「よって貴殿には主の命をもって守備を司ってもらいたい。すぐに来られたし」

「お願いできますか」

使者は彼を見上げて問うた。

「無論」

マンリーコはすぐにそれに答えた。

「この命我が主君のもの。ならば喜んで差し出そう」

「それは何より」

「だがまだ手紙は残っているな。どれ」

彼は再び読みはじめた。

「なおレオノーラは貴殿の死の報を誤り信じ近くの修道院に入りヴ
ェールでその身を覆うとのこと……何っ!？」

それを読んだマンリーコは思わず声をあげた。

「これは本当か!？」

「はい」

使者は答えた。

第二幕その四

「どうしたんだい？」

アズチエーナは我が子の只ならぬ態度に問うた。だがマンリーコは彼女に答えはしなかった。

「馬はあるか」

使者に問うた。

「はい、山のふもとに」

「わかった。ではそれを使わせてもらおう」

「はい」

「その修道院は何処にあるのだ？」

「私が案内致します。御安心を」

「わかった。よろしく頼む」

彼はそれも聞いて頷いた。

「マンリーコ」

ここでアズチエーナは我が子の名を呼んだ。

「何だい、母さん」

「一体何をするつもりなんだい、御前は」

「決まってるじゃないか」

彼は強い声で答えた。

「レオノーラを救いに行く。それ以外に何があるというんだい？」

「馬鹿なことを言うでないよ」

母は激情にかられようとす息子を叱った。

「そんなことをしても何にもならないよ」

「少なくとも俺にとってはそうじゃない」

マンリーコはマントを羽織ながらそう答えた。

「だから行ってくるよ。安心して」

「安心できるわけじゃないか」

彼女も感情的になってきた。

「御前はあたしの何だい!？」

「息子さ」

「そうだろう、じゃああたしが御前をどう思っているかわかるね」
「勿論」

「じゃあいうよ。傷がなおったばかりのその弱った身体で馬に乗る
つて?人もいない荒れ道を通るつて?冗談じゃないよ」

「それがどうしたっていうんだい」

しかしマンリーコは母のそうした忠告を聞こうとはしなかった。

「俺にとってレオノーラは全てだ。それを救わなくてどうするんだ」

「あたしにとっては御前が全てなんだよ」

アズチエーナも引くわけにはいかなかった。

「御前はあたしにとっては血そのものさ。御前の流す血はあたしの
血なんだよ」

「それはわかってるよ」

「わかってないから言うんだ。御前がいなくなったらあたしはもう
生きてはいられないんだよ」

「それは俺だって同じさ」

マンリーコは言った。

「俺はレオノーラがいなくては生きてはいられないんだ。今のこの
気持ちを抑えることは誰にもできはしない」

「あたしでもかい」

「そうさ」

彼は強い声でそう答えた。

「だから俺は行く。けれど絶対に帰って来る。だから安心して」

「またそんなことを」

彼女は彼の身体を掴もうとする。しかしマンリーコはその前に動
いた。

「行って来るよ」

「お待ち」

「御免、それはできない」

「マンリーコ！」

アズチエーナはまた叫んだ。だがそれより前に彼は出た。そして山を降りて行った。アズチエーナはそれを見てただ泣き崩れるだけであった。その姿は悲嘆に支配されていた。

その修道院はカステルロールの近くにあった。大きな修道院であり中庭もあった。

そこに男達がいた。マントに身を包み剣を腰にかけている。

「まだ来ないのか」

その先頭にいる伯爵が後ろに控える者達に問うた。

「はい、まだ誰も」

フェルランドがそれに答えた。

「もうすぐだと思えますが」

「そうか」

伯爵はそれを聞き頷いた。

「ならばよい。準備はできておるな」

「はい」

一同それに答えた。

「あとはレオノーラ様が来られるだけです」

「よいぞ。そして彼女は私のものだ」

伯爵は満足そうにそう言った。

「その時は近い。彼女は一度は私のものとなる筈だった。あの男を倒したその時に」

「はい」

「しかし彼女は祭壇にその身を捧げるといふ。そんなことが許されるものか。彼女は私だけのものだからな」

その目には恋と野望に燃える炎が宿っていた。

「あの微笑を手に入れる為ならば私は何でもしようぞ。例え神に背こうとな」

強い決意もそこにあった。

第二幕その五

「伯爵」

フェルランドが声をかけた。

「何だ」

「本当に宜しいのですね」

「当然だ」

「修道院とことを構えることになりかねませんが」

「わかつておる」

しかし彼は引くつもりはなかった。

「だがそれがどうした。私のこの想いは誰にも負けないものだ」

「それはわかつておりますが」

「フェルランド」

ここで伯爵は彼の名を呼んだ。

「はい」

「そなたは私のことを幼少の頃から知っているな」

「はい」

彼は伯爵が幼い頃からその側に控え仕えてきたのである。

「ならばわかつている筈だ。私がこうした時決して引かぬのを」

「はい」

「必ずや彼女をこの手に入れる。その為なら」

言葉を続けた。

「教会を敵に回そうとも構わぬ」

「左様ですか」

フェルランドはそれを聞いて覚悟を決めた。

「では後のことは私にお任せ下さい」

「いつも済まぬな」

「いえ」

伯爵の謝罪にも応えた。

「それが私の務めでありますから」
「すまぬ」

しかし伯爵は引くつもりはなかった。彼等はここで木の陰に隠れた。

「まだか」

伯爵は木の陰でそう呟いた。

「落ち着きなされ」

フェルランドはそんな彼を宥めた。

「必ず来ます。ですから」

「そうだな」

彼は落ち着くことにした。

「皆の者、頼むぞ」

「はい」

フェルランドだけでなく他の者もそれに頷いた。

「神に逆らおうとも」

伯爵はまた呟いた。

「彼女をこの手に入れなければならぬのだからな」

「はい」

ここで尼僧達の夜のミサの音が聴こえてきた。

「ほう」

それは清らかな女達の声であった。伯爵達はそれに耳を傾けた。

「エヴァの娘達よ、過ちが貴女をふさごうともいわずれ悟ることでしょう」
「エヴァか」

伯爵はその名を聞いてふと声に出した。

「この世は夢幻に過ぎないということ。この世における望みは儚いものであることを」

「それは違うな」

しかし伯爵はそれを否定した。

「私の望みが彼女である限り」

「さあ、神が授けられたヴェールが貴女を守ります。この世でのことからは全て解き放たれました」

「そうすれば私にはもう生きる意味はない」

尼僧達の言葉と伯爵の想いは全く異なるものであったのだ。

「天に身を捧げられなさい。そうすれば天は開かれましょう、貴女に」

「例えそうだとしても」

伯爵はまた言った。

「私には彼女が必要なのだ」

やはり彼の決意は固かった。そしてそこに二人の女がやって来た。

「あれは」

「お待ち下さい」

フェルランドは出ようとする伯爵を制した。

「まだです。十分に近付いてから。よいですね」

「わかった」

彼は落ち着きを取り戻しそれに頷いた。

「今が肝心だからな」

「はい」

伯爵はまた隠れた。そしてこちらにやって来るその二人の女に目をやった。それは伯爵の予想通りであった。

「お嬢様」

「ええ」

レオノーラはイネスの言葉に答えた。

「もうすぐね。もうすぐで私は神のお側に参ることができるとだわ」

「残念です」

嬉しそうなレオノーラとは正反対にイネスは沈んでいた。

「どうしてなの？」

「これでお別れかと思うと」

イネスはその目に涙を宿していた。

「それはそうだけれど」

それを見たレオノーラの心も痛んだ。ただそれでももう彼女は意を決していたのである。

「もう私にはこうするしかないから。それはわかってね」
「はい」

イネスもそれに頷くしかなかった。

第二幕その六

「あの方がもうおられないのなら。俗世にいる意味はないわ」

「そして祭壇に身を捧げられるのですね」

「ええ」

レオノーラは頷いた。

「最早私の望みはそれしかありません」

「それはならぬ」

ここで伯爵が木の陰から姿を現わした。

「伯爵」

「貴女には婚礼の為の祭壇しか必要ない」

「何を仰るのですか!？」

「それは」

レオノーラのその問いに答えるかのように彼の後ろにフェルランドと兵士達が姿を現わす。

「こういうことだ」

「まさか!」

「その通りだ」

イネスの驚きの声に答えた。

「では来るのだ。私の手の中に」

「あああ……」

驚きと恐怖で身体が動かなくなった。伯爵はそれを知っているのかゆっくりと近付いて来る。それがレオノーラの恐怖をさらに高めていた。だがその時であった。

「待て!」

不意に誰かの声がした。

「又ツ!」

「その声は!」

それを聞いた伯爵とレオノーラは同時に声がした方に顔を向けた。

そこには白銀の満月を背にしたマンリーコが立っていた。

「マンリーコ様」

レオノーラが彼の姿を認め喜びの声を漏らす。

「伯爵、無体は許さんぞ」

「フン」

しかし彼を見ても伯爵は怖気づいてはいなかった。

「死人が何を言うか」

「生憎だが私は生きている」

彼はそう返した。

「今その証拠を見せようか。地獄に私がいるかどうか」

「面白い」

伯爵は彼と正対して笑った。

「一人で何をするつもりか」

「誰が一人と言った」

「何!？」

その時だった。マンリーコの後ろから一斉に叫び声があがった。

「何っ!」

それを聞いた伯爵とフェルランド達は思わず声をあげた。見れば

そこには兵士達がいたのだ。

「貴様の手勢か」

「如何にも」

マンリーコは答えた。

「これで五分と五分だ。だが私にあつて貴様はないものがある」

「それは何だ」

「彼女の愛と」

「又ウウ」

それを聞いた伯爵の顔が歪んだ。

「神の御加護だ。それがあからこそ今私はここにいるのだ」

「それが何時までも続くと思っているのか」

「無論」

マンリーコも負けてはいなかった。

「ならば今それを見せようか」

「望むところ」

両者は剣を抜いた。双方の後ろに控える者達も同じだ。そしてレオノーラを挟んで激しく睨み合う。

「死にたいようだな」

「それは貴様にそのまま返そう」

相変わらず強い調子で対峙する。

「今すぐ私と彼女の前から去れ、永遠にな」

「それはこちらの台詞。彼女は私だけのものだからな」

「私のものだ」

「どうあっても引かぬつもりだな」

「無論」

「ならば剣で決めようぞ」

「望むところ」

兵士達も前に出る。双方今まさに斬り合わんとしたその時であった。

「伯爵」

フェルランドが彼を制した。前に出る。

「どうした」

「ここは引きましよう。神の御前です故」

「馬鹿を言え」

だが伯爵は取り合おうとしなかった。

「今ここでこの不埒な男を成敗するのだ。その神の御前でな」

「それはわかっております。しかし」

「しかし……何だ？」

「見たところ兵はまだいるようです。何やら気配を感じます」

「何っ」

伯爵はそれに驚いて辺りを見回した。すると闇の中に何か蠢いて見えた。

「まさか」

「有り得ます。もしそうだとすると今ここで戦えば我等は皆殺しに遭います」

その危惧は当たった。彼等の右に新手が姿を現わした。

「マンリーコ、無事か!？」

黒い髪と目をした小柄な男が姿を現わした。青い服に黒いマントを羽織っている。

「ルイス」

マンリーコは彼の名を呼んだ。

「来てくれたのか」

「ああ。山を降りたと聞いてな。もしやと思いここに来たが」

彼はマンリーコ達の側にまで降りてきてそう言った。その後ろには手勢がいる。

「当たりだったようだな。まさか敵さんがいたとは」

そして伯爵達に目をやった。

「ああ。だがここは私の手勢だけで充分だ」

「いや、そういうわけにもいかない」

助太刀を断ろうとするマンリーコに対してそう言った。

「あんたは病み上がりだ。そんな状況で戦ったら危険だ」

「しかし」

「まあここは任せてくれよ。いいな」

「………わかった」

マンリーコは渋々ながらそれに従った。ルイスとその手勢はマンリーコの手勢と共に伯爵達を取り囲んだ。

「さて、これで形勢は変わったわけだが」

ルイスは伯爵達を見据えて言った。

「どうする?、剣を収めるならよし。しかしまだ抜いているというのなら」

彼はそう言いながら剣で伯爵を指し示した。

「わかっているな。さあ、どうするんだい?」

「クツ……」

伯爵は顔を紅潮させていた。そしてその手に持つ剣を振り上げようとする。だがフェルランドはそれを止めた。

「伯爵、多勢に無勢です」

「しかし」

「機会はまたあります。ここは剣を収めましょう」

「だがここで引けば」

「少なくとも命は保てます。生きていれば必ず好機が訪れますから」

「クツ……」

彼も分別がないわけではない。嫌々ながらもそれに従うことにした。

「わかった。ここはそなたの言葉に従おう」

「はい」

伯爵は剣を下ろした。そしてそれを腰に収めた。

「これでよいな」

「いかにも」

フェルランドではなくルイスがそれに答えた。

「ではレオノーラ、貴女は」

「はい」

彼女はそれに頷いた。そしてマンリーコの側に寄る。

「ようやく貴方の許に入ることができましたね」

「ええ」

マンリーコは彼女を抱き締めてそれに答えた。

「この日が来るのを信じておりました」

「私です」

こうしてレオノーラはマンリーコの手の中に入ったのであった。

それを見る伯爵の目は憎悪で燃え上がっていた。

「マンリーコ」

彼は敵の名を呼んだ。

「このことは決して忘れはせぬぞ。必ずや貴様を地獄の業火で焼き

尽くしてくれる」

「できるものならな」

マンリーコはそれに言い返した。

「だがそれは今ではない。戦場でだ」

「そう、戦場でだ」

伯爵はマンリーコの言葉を繰り返した。

「戦場で貴様を必ず倒す。覚えておれ」

「忘れるものか。それはこちらの言葉だからな」

「面白い。ではまた会おうぞ。今度会う時は」

「貴様が死ぬ時だ」

そう言って両者は互いに別れた。マンリーコはレオノーラと共にその場を去った。イネスやルイスもそれに同行する。兵士達が彼等を守っていた。

伯爵とフェルランド、そしてその兵士達はそこで彼等を見るしかなかった。彼等は白銀の月の下憎悪の炎でその身を焦がしていた。

第三幕その一

第三幕 ジプシーの息子

修道院前での衝突からまた数ヶ月が過ぎた。内乱はその間に状況が変わり皇太子側に有利となっていた。それはこのカステルロールにおいても同じであった。

今ルーナ伯爵とその軍はマンリーコ達が籠る城を取り囲んでいた。城の周りには無数の篝火が灯り、そして白い天幕がその中に映っていた。

その中で一際大きく豪華な天幕があった。それこそ指揮官であるルーナ伯爵の天幕であった。

「もうすぐだな」

その前にいる兵士達がそう話していた。

「ああ、もうすぐだ」

別の者がそれに答えた。

「この刃で武勲を挙げる時だ」

一人の兵士が手に持つ槍の穂の手入れをしながら言う。

「敵を倒し武勲を挙げる。今その時が来ようとしている」

「その通りだ」

ここでフェルランドが彼等のところに来た。

「もうすぐ援軍が到着する。そうしたら総攻撃に移るぞ」

「はい」

兵士達は彼の言葉に頷いた。

「その時まで英気を養っておけよ」

「わかっております」

ここで高らかにラツパの音が陣中に響いてきた。

「おっ」

皆ラツパの音がした方に顔を向けた。

「来たか!？」

「来たぞ！」

遠くから一人の兵士が駆けて来た。勇ましい音楽と共に弓を持った兵士達の一団がやって来た。

「遂に来たか！」

「待っていたぞ！」

それは援軍であつた。彼等は胸を張り陣中を行進していた。

「これで全ては整つた」

フェルランドは彼等を見ながら満足気に笑つた。

「明朝攻撃予定だ。あの城には何があるかわかっているな」

「はい」

兵士達は強い声でそれに答えた。

「勝利と栄光、そして」

「戦利品だ」

フェルランドはそれを口にして兵士達の士気を高めることにした。

「あの城には宝の山があるそれも諸君等のものだ」

「おお」

「戦いに勝てばそれは全てそなた達のものだ。それだけではない」

「まだあるのですか」

「うむ。報酬だ。あの城を陥落させればこの戦いは終わったも同然だ」

「はい」

「殿下より特別の報酬が与えられる。貰えるのはあの城にあるものだけではないのだ」

「それはいい」

兵士達は期待に眼を輝かせた。

「我等を勝利と栄光、そして富が待っている」

「そして今それが手に入ろうとしている」

「勝たなければな」

「ああ」

兵士達の士気は天を衝かんばかりになった。そしてそれぞれの持

ち場に戻って行った。

「よし」

フェルランドはそんな兵士達を見て会心の笑みを漏らした。そして彼は伯爵のいる天幕に入った。

「兵士達の士気はどうか」

伯爵はフェルランドにまずそれを聞いた。

「まさに天を衝かんばかりです」

「そうか」

彼はそれを聞いて満足したように笑った。

「やはり援軍の到着がきいたようだな」

「そうですね。そして栄光と褒美を約束しました」

「当然だな。勇者に栄光と褒美はなくてはならない」

「はい」

「私からも褒美を出すと伝えておけ。城壁に最初に登った者、最初に城内に入った者は」

「はい」

「私から最高級のワインをプレゼントする。よいな」

「わかりました」

フェルランドはそれを聞いて頷いた。

「あと城内の財宝は全て兵士達に分け与えよ」

「伯爵は宜しいのですか」

「私は財宝には興味はない」

彼はそう答えた。元々裕福な育ちであるのでそうしたことには興味が薄いこともあった。だが主な理由はそれではなかったのと言っまでもない。

「レオノーラさえ手に入ればいいのだ」

「左様ですか」

「うむ。私には他には何もいらぬ」

その声に熱がこもる。

「レオノーラさえいればな。他には何も必要ない」

そう言いながら城のある方に目をやった。

「あの城に彼女がいる」

「はい」

「夜明けと共に総攻撃だ。私も行く」

「伯爵もですか」

「そうだ。指揮官が先頭に立たなくてどうする。それに」

「それに」

「あの男を倒しレオノーラを手に入れるのは私の仕事だ。私以外に誰が為すというのだ」

「いえ」

フェルランドはそれを止めようとはしなかった。伯爵のその彫の深い顔が篝火に照らし出される。端整であるが何処か悪魔的に見えた。それは篝火のせいであろうか。

「明日だ。明日で全てが決まる」

彼はまた言った。

「待ち遠しいものだ。彼女を一刻も早くこの手の中に置きたい」

声にさらに熱がこもった。だがここで一人の兵士が天幕の中に入ってきた。

第三幕その二

「何かあったのか」

まずフェルランドがその兵士に声をかけた。

「はい」

兵士はそれに応えて頷いた。

「陣の近くを一人の女がうろついておりました」

「女が」

フェルランドはそれを聞いて首を傾げた。

「一体何の用件でだ。ここが戦場なのはわかっているだろうに」

「はい。ジプシーの女でして」

「ジプシーの」

「はい。何分怪しい女でして。問うたところ逃げようと思いました」

「その女、敵の間者ではないのか」

話を聞いていた伯爵が兵士に対してそう言った。

「敵将はジプシーと縁がある者だからな」

それがマンリーコであることはもう言うまでもないことであった。

「そうでしたな」

フェルランドもそれを思い出した。

「ジプシー達が周りにおりますし」

「あの曲もジプシーの者だった」

伯爵はマンリーコが奏でていた曲にも言及した。

「だとするとその女かなり怪しいな。そしてどうなった」

「逃げたのか？」

「いえ」

兵士は伯爵とフェルランドの問いに対して首を横に振った。

「既に捕らえております」

「それは何よりだ」

伯爵はそれを聞いて満足したように頷いた。

「ではすぐにここに連れて来るように。私が直々に取り調べよう」
「わかりました」

こうして程なくしてそのジプシーの女は伯爵の天幕に連れて来られた。見ればアズチエーナであった。

「放しておくれよ」

彼女は手を縛られ、左右を兵士達に押さえられながら天幕の中に連れて来られた。

「あたしが一体何をしたっていうんだい」

「それを今から聞きたい」

伯爵は天幕に入って来たアズチエーナに対してそう言った。

「見たところジプシーのようだが」

「そうだよ」

彼女はふてくされた態度でそれに答えた。

「ジプシーなのが悪いっていつのかい」

少なくとも迫害される立場にはあった。欧州においてジプシーとはユダヤ人と同じくことあらば迫害され、弾圧される立場にあった。これは事実であった。アズチエーナもそれはわかっていた。

「そうは言ってはおらぬ」

だが伯爵はここはマンリーコに対する憎悪を抑えることにした。彼にとつてはジプシーよりもマンリーコの方が遙かに問題であったのだ。

「これから私の質問に答えよ」

「質問に!？」

「そうだ。嘘をつかずにな」

「ふん、まあいいさ。じゃあ答えたら放してくれるんだね」

「それは御前の心得次第だ」

まずそう前置きをした。

「ならばいいな。では答えよ」

「フン」

「何故ここに来た。ここが戦場なのは知っているだろう」

「知っていたさ」

アズチエーナはそう答えた。

「知っていたのか」

「そうさ」

ふてぶてしい口調であった。

「それでもここに来たのだな。その理由は」

「あたしはジプシーだよ。ジプシーは当てもなくさすらつものさ」

「ほう」

「だからふらりとここに来たんだよ。あたし達にとつちや大空が屋根、世界中が故郷だからね」

「それは戦場でも変わらないということか」

「そうさ」

彼女はその質問には滞りなく答えた。伯爵もそれには満足したようであった。

「それはわかった。では質問を変えよう」

「次は何だい？」

「御前は何処から来たのだ」

「ビスカヤからさ」

アズチエーナはそれにも答えた。

「嘘ではないな」

「嘘をついたら唯じゃおかないんだろう？」

「その通りだが」

「だから正直に言つよ。あたしはビスカヤの禿山にいたんだ」

「何っ」

それを横で聞いていたフェルランドの顔色が変わった。

「あの山にか」

その心を疑念が急激に覆っていくのがわかった。そして彼女を見る目が先程とは全く変わっていた。

「貧しかったけれどね。満足していたよ、その山での暮らしに。仲間達もいたしね」

「ジプシーのか」

「他に誰がいるのさ。それに息子もいたし」

「息子が。今もビスカヤにいるのさ」

「出て行ったさ。あたしと同じジプシーなんでね」

彼女はいささか自嘲を込めてそう答えた。

第三幕その三

「そうか。ジプシーというのも難儀なものだな」

「生憎ね。それであたしはその息子を探して当てもなくさすらっているのさ。これでわかっただろう」

「そうだな。私からは早くその息子が見つかればいいなとしか言えぬが」

「有り難うよ」

「あの女の顔」

フェルランドは瞬きもせず彼女を見据えていた。

「まさか」

「ところでだ」

伯爵はまた質問を変えてきた。

「今度は何だい？」

「ビスカヤの山でどれ程暮らしていたのか」

「何でそんなことを聞くんだい？」

アズチエーナはそれを聞いていぶかしんだ。

「一つ聞きたいことがあるのだ。御前がジプシーならな」

「言っとくれけどジプシーだからって虐めるのはよしてくれよ」

「騎士の名にかけてそのようなことはしない。だがな」

伯爵はそう前置きしたうえで問うてきた。

「伯爵の息子のことを知っているか」

「伯爵の！？」

それを聞いたアズチエーナの顔色がサツと変わった。フェルランドはそれを見逃さなかった。

「やはり！」

彼はそれを見て呟いた。

「城から攫われたのだ。もう二十年近く前の話だが」

「それが一体どうしたんだい！？」

アズチエーナは青い顔でそれに答える。

「あたしに何かそれで聞きたいことでもあるのかい？」

必死に冷静さを保とうとする。しかしそれは難しかった。

「御前がジプシーなら知っているとと思つてな。何処に連れて行かれたのかを」

「知らないね」

彼女はしらを切ることにした。

「あたしが知つている筈ないじゃないか」

「そうか」

伯爵はいぶかしりながらもそれに頷いた。

「では仕方ないな」

「ああ。それじゃあたしはこれでね」

アズチエーナはここを去ることを申し出た。

「息子を探さなくちゃいけないから」

「待て」

だがここでフェルランドが前に出て来た。

「どうしたのだ」

「伯爵、騙されてはいけませんぞ」

彼は伯爵にそう答えた。

「伯爵の弟君を殺したジプシーの女を私は知っております」

「知つているのか」

「はい。そしてその女こそ」

彼はそう言いながらアズチエーナに顔を向けた。

「この女です！」

「何っ！」

それを聞いて伯爵だけでなく護衛の兵士達も思わず声をあげた。

「フェルランド、それはまことか!？」

「私も話を聞いていて最初は半信半疑でしたが」

彼はそう断つたうえで伯爵に対して言った。

「先程話を聞いて確信しました。この女こそあの時伯爵の弟君を攫

い火の中に投げ込んだ忌まわしい女です」

「しかしあの女は」

「死んだ筈ではなかったのですか？」

兵士達が彼に問うた。

「私も今まではそう思っていた」

彼はそれに答えた。

「だが今話を聞いていて確信した。あの女は生きていた。そして」

「今ここにいます」

「はい。その通りです」

伯爵にそう答えた。

「では赤子を生きたまま焼いたのはこいつか」

「はい」

「私の弟を殺したのも」

「その通りです」

フェルランドは沈痛な声でそう答えた。

「全てはこの女が為したことであります」

「嘘をお言いでないよ」

だがアズチエーナはここでこう反論した。

「言つに及んで何を言つんだい、この嘘つきが」

「私が嘘を言つたと」

しかしフェルランドはそれに対してすぐに言い返した。

「騎士の名にかけて戯れ言などは言わぬ」

「そうだな」

伯爵は彼の言葉を認めた。

「そなたが嘘を言ったことはない。それは認めよう」

「有り難き幸せ」

「ということはお女よ」

そう言いながらアズチエーナに顔を向ける。

「御前が嘘をついているということになる」

「クッ」

「そして御前は私の弟を攫い殺した忌まわしき悪魔だ。今その天罰を受ける時が来たのだ」

「そうするつもりだい」

「ここまで来てしらを切るつもりはなかった。ふてぶてしい態度でそう返した。」

「締めよ」

伯爵は兵士達にそう命じた。すると兵士達はアズチーナの縄をさらに強く締めた。

「あああつ！」

それを受けて苦悶の声をあげる。

「何てことをするんだい！」

彼女は叫んだ。

「これが人間のすることなのかい！」

「その言葉そのまま貴様に返そう」

伯爵は怒りに満ちた声でそれに応えた。

「我が弟の恨み、今こそ晴らしてくれ」

「フン、どうやらあんたはあの親父よりもずっと酷い奴のようだね」

「何とでも言え」

しかし伯爵の怒りは収まらなかった。

第三幕その四

「精々地獄でも喚くのだな」

「天罰が下るがいいさ。そして死ぬまで後悔するがいい」

「後悔は貴様が地獄に行つてからにしろ。そしてな」

「アズチエーナを見据えたまま言葉を続ける。」

「貴様の息子とやらも近くにいろのだから」

「フン」

だがアズチエーナはそれには口を割ろうとしなかった。

「おおかたあのマンリーコがそうではないのか」

「確かに」

フェルランドがそれに頷いた。

「あの男の周りには肌の浅黒い者が多いです。あの奏でる曲も」

「そうだな。ジプシーの調べだ」

二人の指摘は当たっていた。

「女よ、そうではないのか」

「だとしたらどうするつもりだい」

アズチエーナはそれを認めるしかなかった。

「一体何をするつもりなんだい」

「決まっている」

伯爵は先程とはうって変わって冷徹な声になった。

「貴様の息子も一緒に始末してやろう」

「是非そうなさるべきです」

フェルランドと兵士達がそれを支持した。

「悪党にはそれに相応しい最後を。薪を積みその中で焼き尽くすべきです」

「そしてあたしのお母さんみたいにするつもりかい！」

「そうだ！」

伯爵達は一斉にそれに答えた。

「それこそが神の定め給うた裁きなのだからな」

「貴様はその邪悪な魂を永遠に焼き尽くされることとなるのだ」

「糞っ、それでも人間かい！」

「そうとも、我等は人間だ」

兵士達がアズチエーナの呪詛を受けてそう返した。

「だからこそ邪悪なものを許してはおけない。貴様も母親と同じく地獄へ行け」

「何てことだい！」

アズチエーナは思わず叫んだ。

「ここにいる連中はどいつもこいつも地獄にいる悪魔共だよ！あたしに味方するのは城の中にしかないのかい！」

「今城の中といったな」

伯爵はその言葉を問い詰めた。

「ではあの男は間違いなく貴様の息子になる。それでよいな」
「.....」

アズチエーナは顔を下に向けて沈黙した。しかしそれはもう既に言っている。だからこれ以上何を言っても無駄であった。しかしそれでも沈黙せずにはいられなかったのだ。

「わかった。これで全ては決まった。フェルランド」

「ハッ」

「すぐに処刑の用意を」

「わかりました」

「ただし二つだ」

「と言いますと」

「一つはその女のぶん。そして」

伯爵は酷薄な笑みを浮かべながら語った。

「もう一つは息子のぶんだ。女は火炙りにせよ」

「わかりました。そしてあの男は」

「斧を用意しろ」

伯爵は冷たくそう言い放った。

「斧を」

「そうだ。この女の目の前で首を撥ねよ。よいな」

「ハッ」

「何て奴だ」

アズチエーナはそれを聞いて声に憎悪を宿らせた。

「何処まで酷い奴なんだ。御前はそれでも人間かい」

「貴様には言われたくはないな」

伯爵は怒りに満ちた声でそう返した。

「貴様は私の弟を殺した。だから私は貴様の息子を殺す。それだけだ」

「あたしのお母さんを殺してもまだ飽き足らないのかい」

「あれは天罰だ」

伯爵はそう言い返した。

「父上は貴様の母親に天の裁きを与えられただけなのだ」

「そして今度は御前がかい」

「そうだ。私が行うのは神の裁き」

そこには異端を忌み嫌う心もあった。そして憎い仇を討とうとする心が。恋敵であることもあった。

「貴様にもそれをくれてやる。ゆっくりとな」

「炎でかい」

「貴様はな。息子は斧だ。さっき言ったようにな」

伯爵はまたそう言い放った。

「まずは息子の首を撥ねる。貴様の目の前で。そして言葉が続ける。」

「貴様を焼き殺す。神の炎で魂まで焼き尽くされるがいい」

「そうになったら御前を未来永劫恨んでやるよ！」

「好きにするがいい。私は貴様のような者を恐れはせぬ」

伯爵は相手にしなかった。

第三幕その五

「処刑は二人揃ってからだ。楽しみにしておれ」

そう言うくと天幕を後にした。

「お待ち、何処へ行くんだい」

「決まっている」

呼び止めるアズチエーナに顔を向けた。

「貴様の息子を捕らえる罫を張るのだ。貴様を使ってな」

「おのれ、何処まで卑劣な奴なんだ！」

「卑劣？おかしなことを言う」

怒りに燃えるその目は赤く光っていた。闇の中に伯爵の怒りと憎悪の光が輝く。

「貴様にだけは言われたくはないな。弟の仇に」

「クツ！」

「あの世で私の父と弟に詫びろ。そして地獄に落ちるがいい」

最後にそう言うくと天幕を出た。アズチエーナはそれを憎悪に燃える目で見っていた。奇しくもその光は伯爵が先程放っていたものと同じであった。

この頃マンリーコ達は籠城しながら戦いの準備を執り行っていた。所々で弓をつがえ、刃を磨いている。兵士達は戦いに備えていた。

その中レオノーラは城の中の礼拝堂に続く広間に一人いた。その後ろにはバルコニーが広がっている。

婚礼の白い服を身に纏っている。本来ならば晴れ晴れしい筈であった。しかし彼女の顔は戦場の中にあるせいか暗く沈んでいた。

「レオノーラ」

そんな彼女を呼ぶ声がした。

「マンリーコ様」

彼女は声がした方に顔を向ける。そこには戦装束を身に纏ったマンリーコがいた。黒い服とマントを羽織っている。

「今まで何処にいらしたのですか？」

「城壁にいた」

マンリーコは彼女の問いにそう答えた。

「戦いが迫っている。それは貴女もわかっていると思う」

「はい」

「隠すことは出来ない。敵の援軍が到着した」

「敵の援軍が」

「そうだ。そしておそらく明日の朝には総攻撃が行われるだろう。

今までで最も激しい戦いになる」

「そんな、それでは」

「だが心配は無用だ」

マンリーコは微笑んで彼女を安心させるようにしてそう言った。

「我々は数においては彼等に劣っている」

「はい」

「だがそれ以上の勇氣がある。だから決して負けはしない。それを

今神と貴女に誓おう」

「誓って頂けますか」

「ああ。今誓う」

彼はここでやって来たルイスに声をかけた。

「ルイス」

「おう」

彼はそれに応えた。

「私は暫くここにいます。済まないがその間頼む」

「了解」

彼は快くそれに頷いた。

「頼んだぞ。手抜きはないようにな」

「わかっているさ。それじゃあ」

「ああ」

こうしてルイスは城壁に向かった。マンリーコとレオノーラは再び二人になった。

その二人をバルコニーから見える月が照らしていた。だがその月は雲に隠れ光は殆どなかった。

「何と弱い光なのでしょう」

レオノーラはその月の光を見て不安になった。

「心配することはない」

しかし彼はその不安を取り除こうとした。

「不吉な予感は何も生まない」

「けれど」

「今から私達は永遠の絆を結ぶ。それなのにどうして暗くなる必要があるのか」

マンリーコは優しい声で彼女にそう語りかけた。その目の光も優しいものとなっていた。

「貴女が私のものとなり、私が貴女のものとなる。崇高な愛、神の愛が貴女の心に語り掛けるのが聞こえないだろうか」

「神の愛が」

「そうだ」

マンリーコは言った。

「私にはそれが聞こえてくる。そしてそれが私に強い力を与えてくれているのだ」

「私にそれを分け与えて下さいますか？」

「勿論だ」

マンリーコは強い声でそう言った。

「貴女は私のものなのだから。当然のことだ」

「マンリーコ様」

「若し神が私の命を望まれるとしよう。しかし私はそれだけは受け入れない。例えば心臓を死神の鎌で貫かれようとも私は貴女の許に行く。そして愛の力で甦るだろう」

「それ程までに私を」

「ああ」

マンリーコは頷いた。ここで礼拝堂の方からオルガンの演奏が聴

こえてきた。

第三幕その六

「あのオルガンの曲を聴いて欲しい」

彼はレオノーラにそう囁いた。

「あれは私達を祝福する神の御声だ」

「神の」

「そうだ。だから貴女は心配することはない。神の御加護があるのだから」

「はい」

「そしてそれは私にもある。だから気をしっかりと持ってくれ。いいね」

「わかりました」

レオノーラはそう答えて身を彼の胸に預けた。彼はそんな彼女を受け入れ強く抱き締めた。そして互いの絆を確かめ合った。しかしその時だった。

「マンリーコ！」

ルイスが慌てた様子で広間にやって来た。

「どうした!？」

マンリーコはそれを見てレオノーラから離れてそれに応えた。

「大変なことが起こった」

「敵が攻めて来たのか。夜襲か!？」

「いおや、違う。バルコニーからも見える。見てくれ」

「バルコニーから!？」

「そうだ、早く。気を落ち着けてな」

「あ、ああ」

ルイスの唯ならぬ様子に戸惑いを覚えていた。しかし彼は何が何だかわからず彼に言われるままバルコニーに出た。

レオノーラもそれに従った。

「あそこだ」

ルイスはある場所を指差した。

「あそこか」

「ああ」

マンリーコはそこに目をやった。そしてその顔を見る見る紅潮させていった。

「これは一体どうしたことだ！」

「マンリーコ、見たな！」

「ああ。悪漢共め、何ということをして！」

最早怒りで我を失っていた。レオノーラはそんな彼を恐ろしげに見ていた。

「あの」

「どうした!？」

彼はその紅潮した顔をレオノーラに向けた。闇の中でもわかる程興奮していた。

「どうなされたのですか、そんなに興奮されて」

「怒るのも道理」

声までも怒りに震えていた。

「あれが見えるだろうか」

そして彼も指差した。レオノーラに見せる為だ。

「はい。あれは」

「処刑台だ。火炙りにする為の。そしてそこに引き立てられているあの女性は」

「はい」

無数の篝火の中に一人の女がいた。ジプシーの女だ。

「私の母なのだ！」

「何と！」

それを聞いたレオノーラの顔も驚きで今にも割れそうになった。

「あそこにいるのは私の母なのだ!今殺されようとしているのだ！」

「そんな、何ということ！」

「おのれ、祖母だけでなく母まで殺そうというのか!」

マンリーコは怒りを爆発させた。そして感情のおもむくままに叫んだ。

「ルイス！」

「ああ！」

ルイスもそれに応えた。

「すぐに兵を集めてくれ！全軍だ！」

「全軍か！」

「そうだ！そして奴等を皆殺しにする。いいな！」

「わかった、暫く待っている！」

「ああ！」

ルイスはすぐに姿を消した。そしてマンリーコは怒りに震える目でその処刑台を見ていた。

「あの処刑台に灯される赤い邪悪な炎が俺の身体にも灯る。そして俺の怒りの心を燃え上がらせる。悪魔共よ、今すぐにその炎を消せ！さもなければ俺が貴様等の血でその炎を消すだろう！」

叫ぶ。それはまさに狂気そのものであった。愛による怒りに満ちた狂気であった。

「レオノーラ」

「は、はい」

急にレオノーラに顔を向けてきた。

「私は貴女を愛する前からアジユチエーナ、お母さんの子だった。だからあえて言おう」

声に狂気がさらに満ちてきた。

「貴女の悲嘆も嘆願も私を引き止めることはできない。お母さん、今行く！そして必ず救い出してみせる。それが出来なければ……」

興奮のあまり言葉を詰まらせた。ルイスもいる。

「死ぬ！死ぬ時は一緒だ！」

「マンリーコ！」

彼の後ろから呼ぶ声がした。見ればバルコニーに戦士達が集結し

ていた。

「俺達の命はあんたに預けたぞ！死ぬ時は一緒だ！」

「よし、頼むぞ！」

「おう、戦いだ！共に戦い、共に地獄に行こう！」

「頼むぞ！すぐに出撃だ！総攻撃だ！」

「よし、敵を皆殺しだ！一人残らず殺すぞ！」

「この城を奴等の血で染め上げる！そしてこの灰色の岩の城を奴等の血で赤く染め上げ死体で覆い尽くせ！」

「哀れな母よ、今行く！」

マンリーコはまた叫んだ。そして腰の剣を引き抜き天に突き刺した。

「必ず救い出す。さもなければ死だ！」

「戦いだ！共に地獄に落ちようぞ！」

全ての兵士達がそう叫んだ。そして皆戦場に雪崩れ込んだ。こうして最後の戦いが幕を開けたのであった。

「神様……」

レオノーラは誰もいなくなった城で唯一人立っていた。彼女に出来るのはバルコニーから戦の成り行きを見守るだけであった。

暗闇の中篝火が揺れ白刃の銀の煌きが映し出される。そしてそこから断末魔の叫びと怒号が聴こえてくる。だがマンリーコの声は聴こえてはこない。

ただそれを見、顔を蒼ざめるしかなかった。しかし彼女はこの時決心していたのであった。

「逃げるわけにはいかない」

そう呟くとバルコニーから姿を消した。何処かへ姿を消した。バルコニーには月の光しか残ってはいなかった。そしてその月の光は白銀から血の様に赤くドス黒い色となっていた。

第四幕その一

第四幕 処刑

戦いは終わった。結果は援軍を得ており数に勝る伯爵側の勝利であった。マンリーコ達は無謀な夜襲が失敗しそれにより敗北した。城は伯爵の占領するところとなりマンリーコは捕らえられた。だが一部の兵士とレオノーラは城を脱出し何処かへと落ち延びた。それを知った伯爵の怒りと落胆は目を覆わんばかりであった。

「すぐに探し出せ」

彼は即座に指示を出した。だがレオノーラもその一部の兵士達も行方はようとして知れなかった。マンリーコはその間にアズチーナと共にアリアフェリアの宮殿に護送されその牢獄に入れられた。そしてあとは処刑を待つばかりであった。宮殿の警護は伯爵が受け持つことになっていた。

マンリーコとアズチーナの処刑が迫っていたある夜のことである。宮殿の翼壁に幾つかの影が蠢いていた。皆暗いマントを頭から羽織っている。そしてマントについているフードで顔を隠していた。「こちらです」

その先頭に行く一人が隣にいる者に声をかけた。それは男の声であった。

「はい」

それに応えるのは若い女の声であった。レオノーラの声であった。

「本当に宜しいのですね」

その男ルイスはフードを外してレオノーラに問うた。

「覚悟はできています」

レオノーラもフードを外した。そして意を決したような声でそれに応えた。

「だからこそここに来たのです」

「そうですか」

ルイスはその顔を見て頷いた。見ればその気品のある整った顔がけついで強く固められていた。

「わかりました。それでは私達が出るのはここまでです」

「はい」

そして彼はすぐ上の塔を指差した。

「あの塔が見えますね」

「はい」

「あの塔は監獄になっております。そして我等が同志マンリーコもあの中にいます」

「塔の中に」

「そうです。そして処刑の日はもう間近となっております」

「間近に」

「ええ。おそらく明日にでも執行されるでしょう。そうならば・・・

・・・おわかりですね」

「はい」

青い顔で頷いた。だがその表情は変わらなかった。気丈な顔であった。

「ですからここに来たのです」

「そうなのですか」

「ですから・・・あとは私一人で」

「よいのですね、本当に」

「はい」

レオノーラはコクリ、と頷いた。

「心配はいりませんから」

「わかりました」

「それでは」

ルイス達は彼女に挨拶をしてその場から姿を消した。そして後にはレオノーラだけとなった。ここで急に雨が降りだした。それが彼女の肩や髪をしとしと濡らした。

「これからだわ」

レオノーラは塔を見上げてそう呟いた。

「この雨が私を阻むものになるうとも私は行かなくてはならない」
言葉に込められた決意は揺らいではいなかった。

「だから……雨よ伝えて。私の想いを。塔の中、冷たい監獄の中にいるあの人に。お願いだから」

雨にそう囁いた。

「悲しみの吐息を。囚われたあの人の心を慰めて。この私の想いをあの人のもとに届けて。愛の思い出と夢を」

さらに言葉を続けた。

「けれど……私のこの悩みは漏らしては駄目よ、決して。お願いだから」

ここで宮殿の中から声が聴こえてきた。

「あれは」

レオノーラはそれを聴き顔を上げた。マンリーコの声であった。

「あの人の声だわ」

「聖なる神よ、哀れなる魂を救い給え」

高く気品があり、それでいて野性味のある声であった。

「既に帰らぬ旅に着こうとする魂に慈悲を与え給え」

それはジプシーの歌であった。昔から彼等の間で歌われている死者を弔う歌であった。

「何と悲しい曲」

レオノーラはそれを聞いて思わず呟いた。

「あの歌はまるでレクイエムの様。いえ、きっとそうに違いないわ」

彼女にもそれはよくわかった。

「聴いていると身が凍りつきそう。まるで氷の様に凍てついた炎によって」

彼女はマンリーコの曲を聴き震えていた。

「身体が震える。胸の鼓動が抑えられなくなってきたわ」

恐怖のせいであろうか。それでも彼女は上を見上げた。そこにマンリーコがいる筈なのである。

「死は常に訪れるもの。だがそれを待ち望む者にとってその歩みは遅いもの」

彼の歌は続いていた。

「我が愛しき人よ」

「私のこと!？」

それを聞いて思わず呟いた。

「貴女に永遠の別れを告げよう。そしてまた何時の日か会おう」

「何と恐ろしい言葉」

それを聞いてさらに凍りついた。

「死神がその漆黒の翼を広げ舞い降りてきたようだわ。いえ、もう既にこの宮殿に來ているのかも」

彼女には夜の闇こそそれであるように見えていた。

「あの方の御命を奪う為に。今この宮殿に潜んでいるのかも」

「だが私は後悔などはしない」

またマンリーコの歌声が聴こえてきた。

「貴女への愛を抱いて死ぬのだから。何故悔やむことがあるうか」

「またあの人の歌が」

「さらば、我が愛。我が愛しき人」

「忘れるなんて」

レオノーラはそれを聴いて首を横に振った。

第四幕その二

「そんなことを出来る筈が。それならいつそ私も」

「我が愛は不滅、貴女への愛も永遠だ」

「ええ、それならば」

彼女はあらためて意を決した。

「勝ってみせる。死神にさえ」

そして宮殿の中に入って行った。そして何処かへ向かった。

宮殿の一室に彼はいた。燭台の火に照らされた部屋で数人の家臣達と話をしていた。

「聞いているな、明日のことは」

「はい」

彼等はそれに応えた。

「息子は斧で首を刎ねる。そして母親は」

「火炙りですね」

「そうだ」

部屋の中にいるのは伯爵であった。彼は蠟燭の火に照らされた暗い顔で家臣達にそう答えた。

「処刑は明日に執り行う。よいな」

「わかりました」

「本来は戦いの後に行なわれる筈だったが」

「はい」

「予定が変わってしまったな。だがどちらにしても同じことだ」

戦いに勝利した後伯爵に皇太子から指示が下ったのだ。捕虜を連れすぐに宮殿に入れと。そこで不穏な空気があったからだ。捕虜はそこに潜む者達を釣る餌とする為であった。

「殿下のご指示だ。よいな」

「それはわかっております」

家臣達はまた答えた。

「それでは早速明日に備えます」
「うむ」

伯爵はそれを受けて頷いた。

「では宜しく頼むぞ」

「ハッ」

こうして彼等は部屋を後にした。そして部屋には伯爵一人が残った。

「明日か。思えば長かったな」

彼は言葉に感慨を込めていた。

「憎い男を始末するのにこれ程かかるとは思わなかったな」

今まで心の中に抱いてきた憎悪を晴らす時が来るのを心待ちにしていた。

「だが愛は手に入らないのか。我が愛は」

ここで彼はレオノーラのことを想った。

「カステルロールは手に入った。しかし私が欲しかったのはあの人の心だ」

彼は俯いてそう呟いた。

「一体何処に行ったのか。そして我が愛は決して手に入らないものなのか。それが私の宿命であるのか」

今己の運命を呪った。

「だとすれば残酷な運命だ。人は望んだものこそ得られないものなのか。それが人の世なのか。だとしたら神は何と残酷な方なのか」

「それは違いますわ」

だがここで女の声がした。

「何っ!?!」

彼はそれを聞いて顔を上げた。

「その声は」

そして顔を部屋の入口に向けた。するとそこにはレオノーラが立っていた。

「馬鹿な、これは幻だ」

しかし伯爵は今日の前に映るものを信じようとしなかった。

「レオノーラがここにいる筈はない」

「いえ、こちらに」

だがレオノーラはそれに答えた。

「私はここにおります」

「何故だ、何故こんなところに」

「ある方に案内して頂きました」

「ある方」

「それはお話できませんが」

「そうか」

大体察しはついたがそれは言うつもりはなかった。

「私がここに来たのには理由があります」

「あの男のことか」

「はい」

彼女はその言葉に頷いた。

「伯爵にお願いがあつてこちらに参りました」

「一体何だ」

伯爵は立ち上がった。そして彼女に問うた。

「あの方をお救い下さい」

「馬鹿なことを」

彼はその言葉に対し首を横に振った。

「その様なこと出来る筈もない」

「いえ、伯爵ならば出来る筈です」

「確かにな」

伯爵はそれを認めた。

「私は殿下より捕虜の処遇を認められている。それは事実だ」

「なら」

「だからこそだ。私はあの男とその母親だけは許すことができないのだ」

彼は憎悪を込めた言葉でそう言った。

「それは貴女もよくわかっていることだろう」

「はい」

それに答えた。

「ならばこれ以上言うことはない。帰ってもらいたい」

「そういうわけにはいきません」

しかし彼女は引かなかった。

「私にも意地があります」

「意地か」

それを聞いた伯爵の顔が曇った。

「それは私にもある。わかっておられよう」

「はい」

「父の、そして私の恨み、晴らさなければならぬのだ」

「私は神に誓いました」

「私もだ」

伯爵はそれにも臆することなく答えた。

「復讐と憎悪の神にだ」

「それでもお願いがあります」

「私の神には慈悲の神はない」

「それでも」

「駄目だ」

伯爵はまた首を横に振った。

第四幕その三

「それ程にまであの男を救いたいというのか」

「はい」

レオノーラは頷いた。

「何ということだ」

伯爵はそれを聞いて怒りと憎しみで顔を歪ませた。

「それを私にわざわざ言いに来たのか」

「いえ、違います」

だがレオノーラはそれを拒否した。

「では何だというのだ」

伯爵は怒りで声を震わせていた。

「私のこの怒りが貴女にわかるか」

「はい」

レオノーラは答えた。

「わかっているつもりです」

「では私の怒りもわかるだろう」

伯爵は怒りを爆発させる寸前の状態でレオノーラに対して言った。

「あの男に幾千もの苦痛と数百の死を与えたい」

「それではまず私を」

「そんなことでは私の怒りの炎は収まらない」

伯爵はそれに対してそう返した。

「そんなことをして何になるというのだ」

「では」

レオノーラは部屋を出ようとする伯爵を呼び止めた。

「私を」

「貴女の命なぞ欲しくはない」

「では私自身を」

「何っ!?!」

伯爵はそれを聞いて足を止めた。

「今何と」

「私が貴方の妻となります。っこれでよろしいでしょうか」

「今言ったこと、事実なのか」

「勿論です」

彼女はそれに答えた。

「私も嘘なぞ言いません」

「まことか」

だが伯爵は半信半疑であった。

「私は幻聴を聞いているのではないのか」

「ええ」

レオノーラはそれに答えた。

「私は貴方のもになります。ですから」

彼女は言葉を続けた。

「あの監獄を密かに開いて下さい。そうすればあの方が逃れられま
す」

「うづむ」

だが伯爵はまだ考えていた。

「それでは誓いを見せてくれ」

考えながらもレオノーラにそう言葉をかけた。

「はい」

そしてレオノーラはそれに答えた。

「全てを神に誓いましょう」

「神にか」

伯爵もレオノーラの信仰心の篤さは知っていた。その彼女が神に
誓う、それだけで充分であった。

「わかった」

彼は頷いた。

「では私もそれを信じよう」

「有り難うございます」

レオノーラは頭を垂れた。それが為に伯爵は彼女の目に宿る強い決意の色を見逃してしまった。

「誰か」

伯爵は人を呼んだ。すぐに兵士が一人やって来た。

「何でしょうか」

「実はな」

そしてその兵士に何やら囁いた。

「よいな」

「わかりました」

その兵士は頷いた。そして彼は部屋を後にした。

「これでよし」

伯爵はそれを見送って頷いた。そしてレオノーラに顔を向けた。

「私は約束を守った」

「はい」

「今度は貴女が約束を守る番だ。それはわかっているな」

「勿論です」

レオノーラはそれに答えた。

「貴女は私を手に入れることができます」

「そうだ」

伯爵は頷いた。

「私は遂に貴女を妻とすることができるのだ」

「はい」

「そして私はあの人を助けることができる」

「これ以上はない取り引きだ」

「そうです。それでは」

「うむ。それでは私は塔へ向かおう」

「塔へ」

「そうだ。監獄のある塔へな」

それが何を意味するのか彼女にはよくわかった。

「私は約束は絶対に破らない。それを今から証明しよう。それでは」

な

「はい」

こうして伯爵は部屋を後にした。後にはレオノーラ一人だけが残った。

「確かに貴女は私を手に入れることができます」

彼女は一人そう呟いた。

「しかし手に入れるのは」

ここで右手に指した指輪を口に近付けた。

「骸となった私」

そして指輪に口付けをした。そこから黒い毒が流れた。

「これで私は永遠にあの方のもの」

笑みを浮かべてそう語った。

第四幕その四

「私は清らかなままあの方をお救いすることが出来る。それだけで本望」

青い顔をしていた。だがその表情は強いままであった。

そして彼女も塔に向かった。顔こそ青かったがその足取りは強いものであった。

暗鬱な洞窟である。その中に二人いた。一人は黒い服を着た騎士、そしてもう一人は粗末な服を着たジプシーの女で

あった。騎士は壁に背をもたれさせて足を伸ばして座っている。女は床の上に寝転がっていた。

「母さん」

黒い服を着た騎士マンリーコがジプシーの女に声をかけた。

「眠らないのかい？」

「眠ろうと思っっているんだけどね」

その女アズチエーナはゆっくりと身体を起こしてそう答えた。

「中々眠れないんだよ」

「そうなの」

マンリーコはそれを聞いて頷いた。

「ここが冷えるからかい？」

「いや、違うよ」

「じゃあ何故だい」

「この監獄が嫌なのさ。早くここから出たいよ」

「ここから」

「ああ、そうさ。御前と一緒にね」

「有り難う」

マンリーコはそれを言われて微笑んで答えた。

「その気持ちは嬉しいよ。けれどね」

「いや、奴等はあたしには何もできないさ。だから安心おし」

「どうしてだい？」

「さつき死神が舞い降りてきたんだよ、あたしの目の前に」
「死神が」

「そうさ。そしてあたしの額に死の刻印を打ったのさ。これでもうわかっただろう」

「……ああ」

マンリーコもジプシーの間で育てられてきた。それがどういっとかよくわかっていた。

「あいつ等は冷たい骸を眺めるだけさ、あたしのね」
「骸を」

「だからね、安心おし。御前は奴等があたしの骸に気をとられている間に逃げられるから」

「俺はそんなことはしないよ」

だがマンリーコは母の言葉に首を横に振った。

「どうしてだい？」

「俺はもう最後まで母さんと一緒にいるよ」

微笑んでそう答えた。

「あたしとかい」

「そうさ、決めたんだ」

微笑みながらそう答えた。

「最後まで母さんと一緒だよ。それでいいだろ」

「御前はそれでいいのかい？」

「ああ。だからここにいるんだ」

マンリーコにとってこの監獄を抜け出すのは簡単なことだった。だがあえてそれをしないのだ。

「火炙りになってもいいのかい？」

「覚悟のうえさ」

マンリーコはそう答えた。

「母さんと一緒ならそれもいい」

「そうかい。火炙りでも」

火炙りという言葉を口にしたアズチエーナの顔色が途端に変わった。

「火炙り」

「どうしたんだい!？」

「火が、火が」

目の前に何かを見ているようであった。

「あの日が恐ろしいあの日が」

「母さん」

マンリーコは母を宥めようとする。だがそれでも彼女は我を忘れてうわごとを繰り返す。

「恐ろしい、あの恐ろしい炎が」

「落ち着いて」

しかし彼女は呟き続ける。

「炎が髪にまでつき全身を覆った。目が溶けそれでもあたしを見ているんだ。母さん、見ているよ」

それが彼女の心の原風景であった。燃え盛る炎の中で苦しみながら死んでいく母。アズチエーナにとってそれは地獄の光景に他ならないのだ。

「何故だい、何故母さんが焼き殺されなきゃならないんだい。何でだよ」

「落ち着くんだ、母さん」

「マンリーコ」

アズチエーナは怯える顔をマンリーコに向けた。

「仇を、仇をとっておくれよ、お願いだから」

「ああ」

ここは彼女を宥めることに専念した。

「わかったから落ち着いて。そして今は寝たらいいよ」

「寝ていいのかい？」

「当たり前さ。俺がずっとここにいるから。いいね」

「ああ、わかったよ」

アズチエーナは頷いた。そして床に寝転がった。

「どうも疲れているようだね。どうかしてるよ」

「仕方ないさ。こんなところにいたら」

「うん、そうだね。じゃあお休み」

「お休み、母さん」

マンリーコはあえて優しい声をかけた。そして彼女を落ち着かせた。それで自分のマントを彼女にかけて。

「これなら温かいだろ」

「有り難うよ」

アズチエーナの目に光るものが宿った。

「御前は優しい子だよ、本当に」

「母親を大事にしない息子なんていやしないよ」

マンリーコはそれに対してそう答えた。

「だから、今はお休み」

「そうだね。そしてまた二人で暮らそうね」

「あの山へかい？」

「そうさ、あの山で」

アズチエーナは半ば眠りながらマンリーコにそう答えた。

「そしてまた笛を聴かせておくれ。あたしはそれを聴きながら眠るから」

「ああ」

マンリーコはそれに答えた。

第四幕その五

「きつとね」

「お願いだよ」

アズチエーナはまた言った。

「あたしはそれを聴きながら眠るから」

「うん、お休み母さん」

こうしてアズチエーナは眠りに入った。そして後にはマンリーコだけが佇んでいた。そこに誰かが来た。

「処刑にはまだ早い筈だが」

「処刑ではありません」

それに答えたのは女の声であつた。

「マンリーコ様、貴方は救われるのです」

「その声は！」

マンリーコはそれを聞きハツとした。

「レオノーラ、貴女なのか!？」

マンリーコは立ち上がった。そして彼女を見た。

「はい、私です！」

アズチエーナが暗闇の中から出て来た。監獄の窓から差し込める

光が彼女の顔を照らし出していた。

「貴方の御命を救いに参りました」

「馬鹿な、貴女一人でか」

「はい」

彼女はそれに答えた。

「早く、どうかお逃げになって下さい」

「いや」

だがマンリーコはそれに渋った。

「気持ちは有り難いが」

「何故ですか!？」

「母さんがいる。置いてはいけない」

「それでしたら御母上と一緒に」

「だが母さんはもうすぐ」

この世を去るのだ。それを思うと足が動かなかった。

「ですが今のままですと二度と」

「それはわかっていているが」

アズチエーナを見る。安らかに眠っている。そんな彼女を置いていくことなどできはしなかった。

「どうするべきか」

ここでレオノーラを見た。

「ところで貴女はこれからどうするのだ？」

「私はここに残ります」

彼女は青い顔でそう答えた。

「何故」

「理由は御聞きにならないで下さい。それよりも早く」

「いや、それならば尚更ここから出られない」

「何故ですか!？」

「貴女まで置いてどうして行けるのか」

「私のことはいいですから」

「駄目だ」

マンリーコはそう答えて首を横に振った。

「そこまでして逃げて何になるというのだ。そんなことは私は望まない」

「しかし」

レオノーラも必死であった。だがそれが裏目に出た。マンリーコはあることに気付いた。

「ところで一つ聞きたいことができた」

「何でしょうか」

レオノーラは青い顔のままそれに応えた。

「私を逃がすということだが」

「はい」

「貴女はどうしてそのようなことができるのだ！？一体どうしてだ」
「それは」

レオノーラは口ごもった。マンリーコはそれを見て一層不信感を募らせた。

「何故口ごもる。言えない事情でもあるのか！？」

「いえ」

言える筈もなかった。こうしている間にも死神が彼女の命を蝕んでいるのだ。

「伯爵か」

マンリーコも愚かではない。すぐに勘付いた。

「それは……」

レオノーラはそれを聞き顔をさらに青くさせた。

「あの男に心売ったのか」

「いえ」

「正直に言え、本当のことを」

マンリーコは詰め寄った。だがレオノーラは真実を語ることにできなかつた。

「違います」

「いや、違う」

マンリーコは彼女の言葉を否定した。

「この監獄の扉を開くことができるのは伯爵だけだ。ならば何があつたのかは容易に察しがつく」

「うう……」

「言うのだ、不実な女よ。私に誓った愛を売ったと」

「違います」

青い顔でそう答えることしかできなかった。

「では証拠を見せよ。さもなければ私はここから一步も動かぬ」

「そのようなことを仰らずに」

「駄目だ」

しかしマンリーコの決意も固かった。

「裏切りの代償なぞいらぬ」

彼にも誇りがある。そんなものを受け取るわけにはいかなかったのだ。

「違います」

だがレオノーラはそれを否定した。

「決してそのようなことは」

「違うというか」

「はい」

マンリーコのその問いにも毅然として答えた。

「私に戯れ言を言うような女だったとはな」

しかしマンリーコはそれを信じようとはしなかった。

「所詮そのような女だったということか。私が愛した女は」

「違います」

しかしレオノーラはその怒りの言葉も否定した。

「私を信じて下さい」

「何を信じるというのだ」

マンリーコはまた言い返した。

「私を裏切った女の言葉を。愛を売った女を」

「私はそのようなことはしておりません」

「では何故私を逃がすことができるのだ」

「それは」

やはり言うことはできなかった。

「言えないだろう」

そしてそれこそがマンリーコの疑念の根拠であるのだ。わかってはいてもどうしても言うことができないのだ。

第四幕その六

「不実な女よ」

彼は吐き捨てるようにしてそう言った。

「お怒りをお鎮め下さい」

「どうしてできようか」

「そしてお逃げ下さい」

「出来ぬ」

「そこを何とか」

「くだい！」

彼は怒りに燃えた目でレオノーラを見据えた。 32

「恥知らずが。私を裏切つてなおその様なことを言うか」

「私は裏切つてなどいません」

「なら証拠を見せてみよ」

「証拠ですか」

「そうだ。見せられるのならな」

彼女を睨みつけたまま言う。

「どうだ、出来るか」

「はい」

レオノーラは観念したのかこくり、と頷いた。

「それは……………」

「それは」

マンリーコは彼女の言葉を繰り返す。

「私の顔です」

「顔!？」

「はい。この顔を御覧下さい」

「むっ」

見れば青い。月の光に照らされているその顔は蝋の様に白かった。

「この顔がその証拠です」

「どういふことだ」

「おわかりになりませんか」

彼女は悲しい顔になった。

「この死の淵を覗いた顔を」

「死を」

「はい」

彼女は答えた。

「そうです。私は間もなく死にます」

「嘘を言え」

「いえ」

だがその言葉に首を横に振った。

「これがその証拠です」

そしてその場にゆっくりと崩れ落ちた。まるで糸が切れた人形のようであった。

「マンリーコ様」

「レオノーラ」

マンリーコは彼女に駆け寄った。

「どういふことだ。死などと。まさかそれも」

「嘘だと思われませんか？」

「いや」

彼女の目を見る。嘘を言っている目ではなかった。

「嘘ではないな。それはわかった、安心してくれ」

「はい」

それを聞いてようやく微笑んだ。

「一体どういふことなのだ。教えてくれ」

「私は貴方のお仲間に案内されてここまで来ました」

「そして」

「それから伯爵にお願ひして牢獄を開けてもらったのです。あの人
の妻になることを条件に」

「そうだったのか」

「そしてその時に密かに毒を飲みました。今それが全身に回ったのです」

「ではもう」

「はい」

レオノーラは微かに頷いた。

「私の手を触れてみて下さい」

「ああ」

マンリーコは彼女の手に触れた。言われるがまま。それは氷の様に冷たかった。

「これでもうおわかりでしょう。私は間もなく死にます」

「何を言う、死んではならん」

マンリーコは彼女の身体を揺らしてそう声をかける。

「まだこれからだというのに」

「いえ」

だがレオノーラはまた首を横に振った。

「貴方以外の方の妻となるのなら。そして貴方をお救いすることができるのなら」

弱くなつていく声でそう語る。

「私は喜んで死にましょう」

「馬鹿な、私の為に」

「そう、貴方の為に」

レオノーラは最後に微笑んだ。

「さようなら。ですから」

もう言葉が消え入りそうになっていた。

「お逃げ下さい。お願いです」

そう言うつと遂に事切れてしまった。手がゆっくりと床に落ち目を閉じた。

「レオノーラ……！！」

マンリーコは彼女の亡骸を抱いて慟哭した。もうそれは冷たくなっていた。

「私は愚かだった。貴女のような天使を疑い侮辱するとは……」
「そしてその場に泣き崩れた。だがそれはほんの少しの間だけであつた。」

「これは一体……」

そこに伯爵が入つて来たのだ。

「何故彼女が死んでいるのだ」

「毒を飲んだ」

マンリーコはレオノーラの亡骸を抱きながら言った。顔は彼女の死に顔を見たままである。

「私を救い自らの純潔を守る為にな」

「何ということだ」

伯爵はそれを聞いて呆然とした。そしてそれと共に怒りがその全身を包んだ。

「それ程までにその男がいとおしかったというのか！私ではなく！」

そして人を呼んだ。

「誰がいるか！」

「ハッ」

すぐに数人の兵士がやってきた。

「この女を葬れ。そして」

マンリーコをキツと見据えた。その目には最早冷静さなぞ何処にもなかった。

第四幕その七

「この男をすぐに処刑しろ！火炙りだ！」

「ハッ！」

兵士達は敬礼してそれに応えた。マンリーコはレオノーラから引き離され引き立てられていく。レオノーラの亡骸も運び去られた。

「レオノーラ……！！！」

「案ずることはない」

伯爵はレオノーラに顔を向けるマンリーコに対して怒りの言葉をぶつけた。

「貴様もすぐに彼女の後を追うことになるのだからな」

だがマンリーコはその話を聞いてはいなかった。最後にアズチエーナに顔を向けた。

「母さん」

そして彼女に声をかけた。

「さようなら！これでお別れだよ！」

「連れて行け！」

伯爵の無慈悲な声が響いた。そしてマンリーコは処刑台に連れて行かれた。伯爵は牢獄に残りアズチエーナを見下ろしていた。やがて彼女が目を見ました。

「起きたか」

伯爵は目覚めた彼女を見下ろして言った。

「マンリーコは、あたしの息子は何処だい？」

「知りたいか」

彼は酷薄な声でそれに問うた。

「勿論だよ、一体何処にいるんだい」

「知りたいか」

また問うた。

「いい加減にしておくれよ。知っているなら教えてくれよ」

「いいだろう」

彼は笑いながら窓の方を指差した。

「あれを見るがいい」

そこには火刑台があった。そこに今マンリーコがかけられていた。

「ああつ！」

それを見てアズチエーナが叫んだ。

「よく見る、御前の息子の最後を」

伯爵は彼女の驚き、絶望する姿を見て楽しんでいた。アズチエー

ナは確かに絶望していた。

「ああ、何てことだい！」

「今火が点けられるぞ」

その言葉通り火が点けられた。そしてマンリーコは忽ち炎に包まれた。

「これで終わりだ。貴様の息子は今地獄に落ちた」

「確かにね」

アズチエーナは地の底から響き渡る様な声でそれに応えた。

「マンリーコはこれで死んだよ」

「そうだ、御前の息子がな」

「そうだね」

アズチエーナは無念そうに頷いた。だがそれで終わりではなかった。

「けれどね、それは違うよ」

「何!？」

伯爵はその言葉に耳を止めた。

「それは一体どういうことだ？」

「あたしは昔赤子をさらったのは知っているね」

彼女はゆっくりと顔を上げながら伯爵に対して言った。

「知らぬと思うか」

「そうだろうね。それはわかっているさ」

彼女はゆっくりと言葉を続けた。まるで幽鬼の様な顔で。

「その時あたしが火の中に投げ込んだのはね」

「私の弟だったのだろう。今その仇をとった」

火は燃え盛っていた。最早マンリーコの姿は何処にも見えない。

「違うさ」

「何が違うのだ」

伯爵はまだ彼女が何を言おうとしているのかわからなかった。

「あたしが投げ込んだのはねえ」

「誰だというのだ？」

「あたしの実の子だったんだよ」

「馬鹿な」

伯爵は最初その言葉を信じなかった。

「そんな筈があるものか」

「あるのさ、それがねえ。そして」

まだ言う。

「マンリーコこそ……」

その目にマンリーコが映っていた。既に炎に焼かれその姿は見えなくなっていたがはつきりと映っていた。

「伯爵、あんたの実の弟だったんだよ！」

「何！」

「母さん！」

アズチエーナは両手を大きく天に掲げて絶叫するように言う。

「仇はとったよ！今とったんだよ！」

そう叫び終わるとその場に崩れ落ちた。既に事切れていた。

「何ということだ……」

伯爵はその亡骸をまず見た。

「生きているのは」

マンリーコの炎を見る。そしてレオノーラの青い亡骸が脳裏に浮かんだ。

「私だけか。私だけが……」

絶望に苛まれながらも言葉を吐く。まるで血を吐くように。

「私だけが生きていられようか！」
伯爵は叫んだ。その絶望の叫びが暗闇の中の宮殿に響き渡った。
その瞬間マンリーコを包んでいた炎もかき消えた。そこには灰だけが残っていた。

トロヴァトーレ 完

2005・2・20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3457f/>

トロヴァトーレ

2011年4月28日00時35分発行